

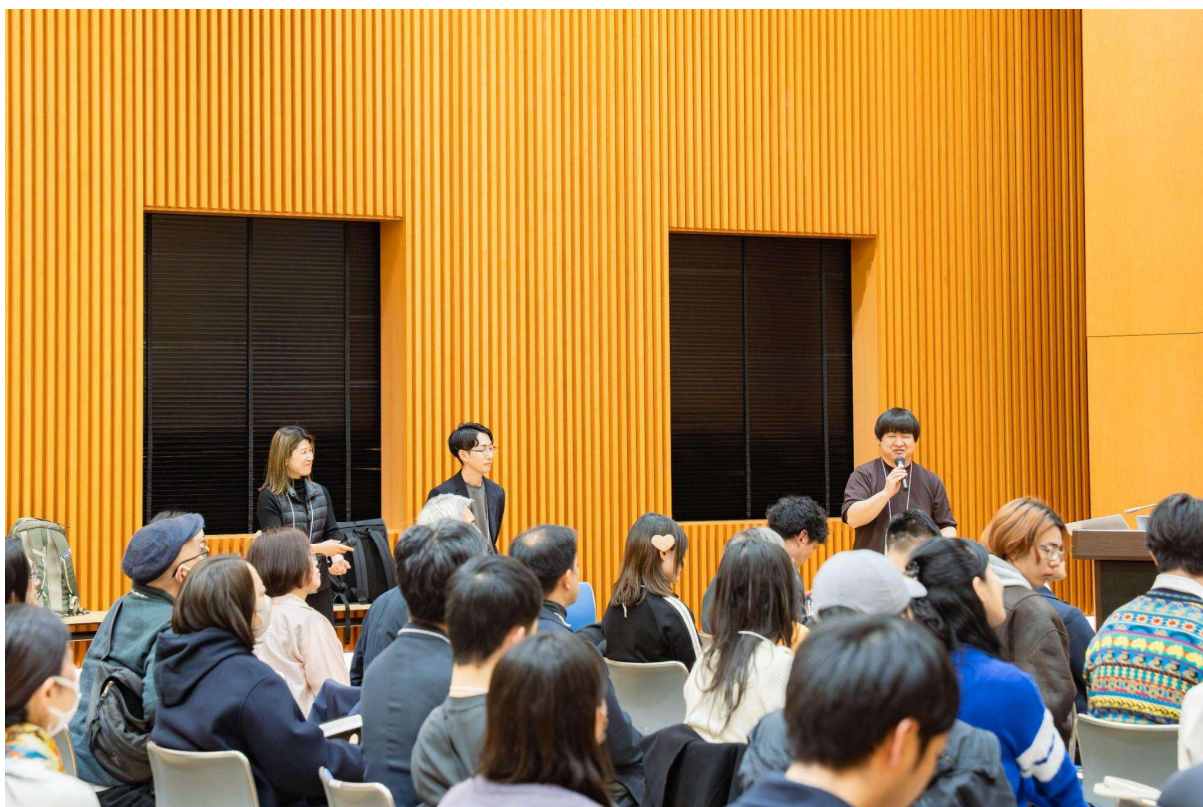
緩やかなつながりと、多様なコミュニティの形がつくる未来。  
「未来の住むまち東山をつくる交流会～みらひがし vol.3～」  
開催レポート



「観光のまち」として知られる東山区には、地域に根付く住民たちによって大切に紡がれてきた「住むまち」としての魅力が秘められています。

「住むまち」としての魅力を発掘・発信すべく、東山区民と行政が協働して取り組む「住んでこそ！東山プロジェクト」。プロジェクトの中で生まれた「未来の住むまち東山をつくる交流会～みらひがし～」(以下「みらひがし」)は、東山で新たな取組や事業にチャレンジする人たちがつながり、互いに応援し合えるコミュニティをつくるイベントです。

第3回目となる「みらひがし」は、令和8年3月11日に東山区役所にて開催。今回は、区外で活動をされているゲストを含む4組のプレゼンターを招き、「住むまち」としての魅力の発掘・発信にとらわれない幅広い取り組みの様子を共有していただきました。プレゼンターによる発表と、約45名が参加し、学びや交流を深めたイベントの様子をお届けします。



株式会社アグティ 齊藤徹さん



齊藤徹さんが代表取締役を務める株式会社アグティは、主に病院や高齢者施設向けの清掃やリネンサプライを行っています。会社の大切にしている理念は「会社は働く人のために存在

する」ということ。2023年に地域循環ワークシェアリング「ACWA BASE」を久御山町でスタート。2025年には同モデルの仕事を京都市梅小路にもオープンしました。

齊藤さん：

私たちが大切にしている理念は「会社は働く人のために存在する」ということ。世の中の意見ではなく、自分たちなりの正解を自分たちで作っていくことを重視しています。

会社の拠点のひとつ「ACWA BASE」は、事業の中の洗濯物を畳む仕事だけを担う仕事場で、「誰がいつ来てもいい、いつ帰ってもいい、仕事をしてもしなくてもいい。でも仕事をした分はちゃんとお金がもらえる」という場所。地域のコミュニティ拠点となるようにと設けた場ではありますが、あくまでボランティアではなく「事業」としての流れをきちんとつくるように意識した設計です。



地域の方が楽しく集い、働くコミュニティをつくる一方で「意図的に人と人を繋がない」ということも重要視しています。繋がりたい人は繋がり、そうでない人も同じ場所において顔を知っている、そんな緩やかな繋がりを大切にしたいと思うからです。事業は、まちづくりのために始めたわけではありませんが、働く人たちの暮らしや地域が豊かであってほしいという思いが、結果としてまちづくりにつながっていると感じています。

傍楽 駒井亨衣さん | いばしょかふえ 宅間和美さん



駒井亨衣さんは、自身の子どもが不登校を経験したことをきっかけに、2014年「働く・生きる」を共に考えるお母さんのための居場所「傍楽（はたらく）」を中京区に設立。現在は「いつもお母さんの味方」を掲げ、不登校・子育てに悩む保護者の支援や、大阪府吹田市に設立したオルタナティブスクール「Teska Terrace(テスカテラス)」の運営を行っています。

駒井さん：

子どもが不登校を経験した際、同じ経験をされたお母さんたちに助けをいただいたことが取り組みにつながっています。不登校の当事者や親にとって「居場所がない」という問題が一番つらいことです。みんなで集い仲間をつくることのできる場所を持ちたいと、色々な方に相談し積極的に思いを口にしたことで、この場所を持つことができました。

傍楽では、お母さんたちが自身の気持ちを話し、お子さんとの良い関係を築くための学びの機会の提供の他にも、「大人の遠足」と言ってお母さんたちが楽しむことができるようなイベントも開催しています。取り組みに興味を持っていただけたら気軽に足を運んでください。



「学校に行けない私はどこへ行ったらいいの？」という我が子の問いかけから活動をはじめた宅間和美さん。2020年に傍楽でスタートした「いばしょかふえ」は現在、不登校の親子のための場から、学校以外の居場所が欲しい子どもや、思春期の子を育てる親など幅広い人が気軽に集える「第3の居場所」へと変化し続けています。

宅間さん：

いばしょかふえは、「所属しなくていい」「何もしなくていい」「いつ来てもいつ帰っても大丈夫」を原則とした「安心して社会に繋がれる、学校以外の場所」です。活動開始後、徐々に利用が増える中、不登校ではないけれど学校以外の居場所が欲しい子どもや、職場や地域以外とのつながりを探す大人の声も聞こえてくるようになりました。現在では、誰もが気軽に参加し、ゲームや夜ご飯を楽しむオープンなイベント「いばしょかふえ night」等の取り組みも行っています。

活動で私が気づかされたのは、子どもに生き生き過ごしてもらうには、まず「大人たちも自分自身を大切にする」ことが大事ということ。時には誰かを頼り、大人や運営をする立場の人も無理をせず支え合えることが理想だと思っています。



株式会社津乃吉 吉田大輔さん



吉田大輔さんは、会社員を経て家業である京佃煮やちりめん山椒の製造・販売を行う「津乃吉」を継承。「からだが求める良い素材」だけを使用した健やかな商品づくりに加えて、出汁の素晴らしさ、食の楽しさを伝える活動に取り組んでいます。

吉田さん：

津乃吉を「無添加」食品の店としてご存じの方も多いと思いますが、私たちにとっては、本当に美味しく身体に優しいものをつくるための「手段」が無添加の商品づくりという認識です。手段が目的になってしまわないよう意識していて、これは私たちが仕事をする上で大切な基準だと思っています。家族や関わる人たちがみな幸せであること、それが最優先したい大事なことです。

また、最近ではイベント開催等「自分の好きなものを周りにも好きと思ってもらえるように働きかけること」が、地域とのつながりを生んでくれていると体感することもあります。取り組みを続けるうちに「巻き込まれて」くれる人も、仕事やイベントに誘ってくれる人も増え、これが地域に根付くことなのではないかとも感じています。



## 大黒湯 竹林昂大さん



京都大学の7回生の竹林昂大さんは、人力車の俵夫（しゃふ）として7年間東山の街を走ってきました。ある日、仕事帰りに通っていた銭湯「大黒湯」の突然の廃業を知ったことで、お世話になった東山の街の人々への恩返しをするために継業を決意。仲間たちの力を借りて、2025年9月に大黒湯を復活オープンします。

竹林さん：

銭湯は単にお風呂に入る場所ではなく、「地域コミュニティの中心」です。名前も知らないけれど「裸の付き合い」で毎日のように顔を合わせ言葉を交わす、そんな緩やかな繋がりが保たれてきた場が銭湯だと思います。

京都は銭湯の街であり、学生の街としても知られていますが、東山区の高齢化率は著しく高く、若者が少ないというのが現状でもあります。私は東山に関わるようになってから、京大生や仲間と共に地域行事への積極的な参加や、消防団の活動等を行ってきました。大黒湯の存在も、そのような東山区においての「若者が集まるコミュニティのハブ」の役割を担えるよう目指していきたいと考えています。



交流・PR タイム



登壇者たちの発表の後は、イベント参加者による交流と、東山で活動をする参加者が取り組みやイベント情報を自由にPRできる告知タイムが設けられました。

普段は東山区で仕事をしている方や、地域でやってみたいこと、すでに進めている活動やイベントがある方が多く参加してくださった本イベント。共通の話題や課題感を持つ人も多く、交流中は時に熱い議論や共感、手助けの申し出の聲が聞かれる瞬間も多く見られます。

また、区や市外からの参加者が語る意見や、移住者による感想などに東山在住の参加者が熱心に耳を傾ける姿も印象的でした。



PRタイムでは、12名がステージ前に発表の列をつくり、自身の活動を熱意たっぷりにアピール。

東山区まちづくり支援事業の助成を受け、3月末に開催される多世代交流イベントの周知や、美容会社の経営者による「東山区の高齢者を元気づける美容体験イベント」実施の告知、他にも「認知症の方や生きづらさを抱える方の就労支援活動」「地域とつながる映画の上映会のしくみづくり」「大好きな東山のwikipedia記事を作成したい」など、東山で行われている様々なプロジェクトや、やってみたいことが発表されました。

## 「みらひがし」からはじまる新しいつながり方



最後に、東山区役所の河上課長にコメントをいただき、第3回目のみらひがしは無事終了の時間を迎えました。

河上課長：

区役所は「地域コミュニティハブ」として、皆さまを結びつける役割を担いたいと考えています。地域を明るくする場づくりに何ができるだろうかと試行錯誤している日々ですが、参加者同士の繋がりが自然と広がっていく感じが感じられた「みらひがし」は、理想的な形のひとつに思えました。区役所は決してハードルが高い場所ではありません。何かチャレンジしてみたいことがある方は、気軽に相談に来てください。



緩やかなつながりや、多様なコミュニティのあり方がキーワードとなった今回の「みらひがし」。東山でこの日生まれたつながりが、今後、新しい地域コミュニティの姿を形作っていくのかもしれませんが。